

平成25年度 課題対応型学習活性化セミナー 事業報告

I 事業の概要

- 1 研修テーマ 「本格的な高齢社会における高齢者の社会参加支援のあり方」
～NPO、民間団体等と行政の効果的な連携に向けて～
- 2 趣 旨 地域住民が、現代的課題への関心を高め、その課題解決に向けた主体的な行動を促す学習活動を活性化するために、他機関や団体等との連携・協力を含めた具体的な方策にかかわる専門的な知識や技術の習得に関する研修を行う。
- 3 主 催 北海道立生涯学習推進センター
- 4 期 日 平成25年9月5日（木）～6日（金） 2日間
- 5 会 場 道民活動センタービル「かでの2・7」10階 1060会議室
- 6 参加対象 (1) 市町村・市町村教育委員会職員
(2) 各種審議会委員、各種指導者（アドバイザー・コーディネーター等）
(3) 民間団体（NPO、社会教育関係団体、まちづくり活動実践者等）関係者
(4) その他（ボランティア活動や地域活動に関心のある方） 等
- 7 参加状況 参加者申込数 60名（定員40名）

ブロック	道 央			道 南				道 北			道 東				本庁 道庁 道外	
	管内	空知	石狩	後志	胆振	日高	渡島	檜山	上川	留萌	宗谷	網走	十勝	釧路		根室
参加数	8	3	7	1	4	1	0	0	2	0	1	0	3	1	0	2
小 計	4 6			5				3			4					
合 計	6 0															

8 日 程

		9:30	10:00	10:15	10:30	12:00		13:00	15:00			17:00
1 日 目	受付	開 会	説 明	基調講義				昼食 休憩	実践発表			感想・意見 交流
		9:30		12:00		13:00		14:30		14:45		
2 日 目	ワークショップ						昼食 休憩	特別講演 道民カレッジ連携 講座（1単位）	情報 提供	閉 会		



1日目

(1) セミナー趣旨等説明 (担当：北海道立生涯学習推進センター職員)

(2) 基調講義 テーマ「NPOと行政の連携による高齢者の社会参加促進方策」

〔講師〕 北星学園大学社会福祉学部 教授 杉岡直人氏

- ・高齢化の状況について
 - ・高齢者にとっての社会参加活動の意味、なぜ、高齢者による社会参加が進まないのか
 - ・高齢者の社会参加活動を進めるための具体策、仕掛けとは
- 以上の視点で、社会的背景、道内・外における活動の先進的な実践等やNPOと自治体の連携による支援策等の内容をお話いただきました。

<キーワード・ヒント等>

- 社会参加を仕事につなげる時代になる。
- 年金について (1970年、8人で1人を支える時代から現在は1.2人で1人を支える時代)
- 少子化 (とにかく子どもが少ない)、年金財源不足、介護人材不足
- 労働不足をカバーするために若者に携わってもらう。
- 教育委員会は、若者たちが主体的に事業を運営できるように育てていただきたい。
- 人材、リーダーを養成するのがポイント (地域の中で見つける→その人に研修を受けさせる)
- 地域共済 (支え合い) システムの重要性 (動かす仕組み、行政の仕組み)
- 自分たちの「まち」を自分たちで守る。
- 食の確保、医療の確保
- 住民が協力しあう仕組み (みんなが集まって働ける、役割を持てる)
- 地域食堂、コミュニティレストランの事例
- 社会参加=働くこと (働くことに結びつく社会参加)
- 無理なく働ける (参加できる) 仕組み
- コミュニティレストラン
 - ・働きたくても働けない人への応援
 - ・高齢者差別=社会の役に立てない
 - ・可能性を生かせるように障がいのある方への仕事を提供する
 - ・障がいの有無にかかわらず地域での仕事の場づくり
 - ・20年前の東京：国分寺のコミュニティレストランの事例
 - ・北海道コミュニティレストランネットワーク、余市町の事例
 - ・仕組みを周りの人に伝える。
 - ・NPOとしてレストランを運営するため、地域の担い手を育成するために人材の養成
- 生活支援センター機能の役割を果たすべき
- 自立生活支援機能 (孤立化の防止)
- 循環型まちづくり機能
- 消費者が生産者を応援する仕組み
- 行政が果たす役割は、情報の提供
- リーダーがリーダーを育てる (本当のリーダーを育てるのがリーダーの役目)
- 生涯学習が評価される時代 (ボランティアの有償・無償)
- ボランティアと隣人の区別は難しい (ボランティアとボランティアではないという違いの区別)



(3) 実践発表

①自らの学びを楽しみ、子どもたちの学びも支えている高齢者の取組

男声読み聞かせ隊 with Ms (恵庭市) 事務局長 近藤 哲夫 氏

60代以上男性(中心)メンバーによる読み聞かせグループ。読み聞かせについての研修を継続的に行いながら、主に保育園、幼稚園、小学校を回り、それぞれの持ち味を生かした読み聞かせを行うことで、充実感が得られ世代間交流の活発化にもなっている。

②健康や生きがいがづくり等を目的にビジネスを展開している高齢者の取組

山菜料理の店グランマ高齢者コミュニティビジネス・麻の会(白老町)

代表 赤崎 寿子 氏

特定非営利活動法人しらおい創造空間「蔵」 理事長 坂本 譲 氏

高齢者の健康づくりや生きがいがづくり等を目的に「高齢者コミュニティビジネス推進事業」に取り組み「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」の一環として、「高齢者コミュニティビジネス・麻の会」が、白老町やNPO法人しらおい創造空間「蔵」などと連携して実施している。

③生きがいがづくり等を目的に地域の文化・芸術を支えている高齢者の取組

演劇企画集団 銀の会(札幌市)

事務局長 秋元 博行 氏

60歳以上のシニアが対象の「創造活動をする演劇企画集団」としての活動は12年目に入る。設立のきっかけは、「シニアが増加する時代だからこそ、何かをしたかったし意味がある」と思ったこと。当初は、2年に一度くらいの公演を考えていたが、現在は地方公演を含め年数回の公演を実施している。

<キーワード・ヒント等>

- 最高齢者78歳、週1回の例会で読み聞かせの研修を行っている。
- 読書のまちづくり、ブックスタート、小中学校図書館への専任司書の配置
- 個人的な活動・入会の動機は、自分自身の脳卒中のリハビリ
- 白老町内の高齢化率 36.49% 65歳以上の人口 6,867人/全町人口18,819人
- 徳島県の「葉っぱビジネス」で高齢者が生き生きしているのをテレビで見て「これだ」と思った。
- 高齢者の生きがいがづくり、商店街の活性化への貢献、自己資金150万円、空き店舗の活用
- 新しい公共の場づくりのためのモデル事業補助金の活用、男性の高齢者の活用、地域資源の活用
- 自分のために生き他の人のためにも生きる「あせらずに、しなやかに、したたかに」演劇を楽しむ
- 毎週金曜日の例会出席率 85~90%、例会・稽古が楽しく励みになる。稽古場は恥をかくところ→信頼感が生まれる。(課題) 地域への広がり、マスコミへの働きかけ、稽古場・資金の不足



(4) 感想・意見交流（進行：北海道立生涯学習推進センター職員）

<主な意見>

- 高齢者として活動している方の話を聞くことができ、社会参加について何を思い、何を望んでいるかを知ることができた。大変参考になった。
- 実際には、どの年代から「高齢者」と捉えれば良いのか。
- 高齢者の社会参加を促進しようとしている今、「高齢者」という言い方や捉え方が、すでにマッチしていないような気がする。熟年世代、創年（壮年）世代など、表現を変えた方が期待感を増すかもしれない。
- 高齢者の社会参加活動促進に向け、直面するお金（予算）の問題をいかにクリアするのか。



2日目

(1) ワークショップ（進行：北海道立生涯学習推進センター職員）

基調講義、実践発表を参考にし、本格的な高齢社会を迎えている状況で、高齢者の社会参加について、それぞれの地域の現状・課題を探り、NPO、民間団体等と行政が、どのような連携をして支援を行っていくべきか、その効果的な具体策等を参加者同士で一緒に考えました。
<1グループ4人一組に分け、NPO・民間団体等と行政職員が半々となるよう編成しました。>

<主な意見>

- 教育委員会とは、どんなことをやっているのか。特に社会教育は何をやっているのかわからない。
- NPOはどういうきっかけで始めるのか。難しそう。
- 青少年教育施設とは、普段どうしているのか。高齢者は使えないのか。
- 高齢者の中でもリーダーや中心になる人材を発掘・育成することが大事
- 地域で活躍する高齢者になってもらうためには、世代間交流が大切
- 何歳からを「高齢者」と言うかを考え直さなければならない
- いろいろな立場の高齢者がいるので一概に「これが必要」とかは言えない、望んでいることの調査が必要
- 高齢者のノウハウが生かせるような環境づくりが必要
- 公共施設の活用促進策を住民目線で柔軟に考える（教育委員会）
- 参加できる行政の説明会や会議の傍聴などには積極的に参加する（住民）
- 特定の課題については小回りがききノウハウも多い、ミッションに合うものは連携できる（NPO、民間）



(2) 特別講演 テーマ「絵本の里26年『映画じんじん』までの道のり」

～お年寄りの方たちの地域づくりにおける役割～

[講師] けんぶち絵本の里を創ろう会 初代会長 高橋 毅 氏

剣淵町が26年前、「町おこしに」そして「次世代に残せるもの」と選んだものは“絵本”であった。「絵本の館」を作ることから始まった「絵本での町おこし」は、いつしか評判を呼び、2004年には「絵本の館」の新館がオープン、現在は約3万5000冊にも及ぶ絵本を収蔵している。高橋さんは、農家を営み仕事の合間を縫っては“読み聞かせ”の活動を26年間続けている。

- ・ 少子高齢化、過疎化等の現代的課題を抱える中で、まちの活性化に向けて積極的に活動している。
 - ・ 民間と行政との効果的な連携により継続的な活動が可能になっている
- 以上の実践から参加者が地域へ戻り、今後の活動におけるヒントとなる内容をお話しいただきました。

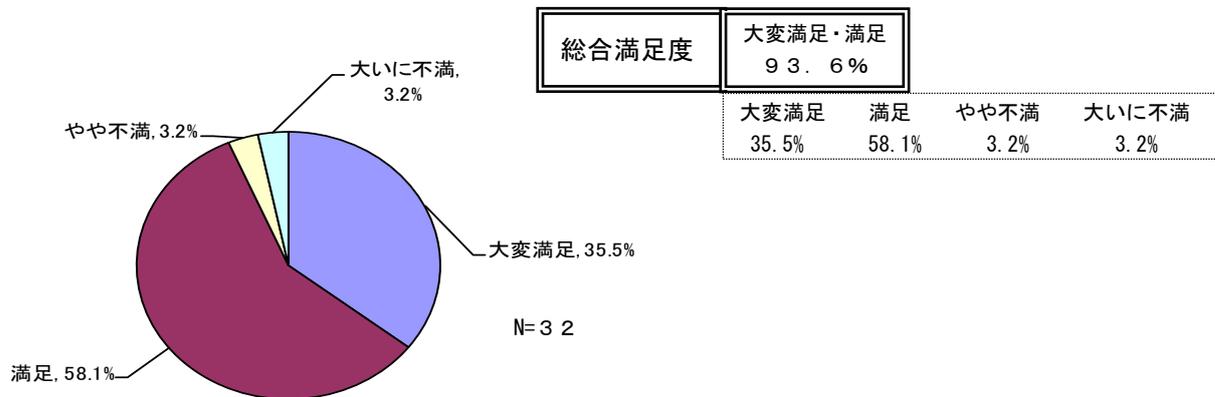
<キーワード・ヒント等>

- 農村にも過疎化が迫り、この危機感が商工会の青年たちの間に広がり、活性化への模索が始まった。
- ススキノで仲間と酒をのみ「剣淵」と聞いても知っている人はいない。お酒の「剣菱」と間違われた。
- ひとに知られるまちになりたい。
- 経済フォーラムやまちおこし講演会から得るものは見いだせなくなっていた。
- 商売以外のところにヒントがあるかもしれない。
- 士別市にパリから10数年ぶりに帰国した、版画家 小池暢子氏の講演を聴いた。
- 「世界から見た日本人」外国人の日本人観、文化や芸術への理解
- 福武書店 児童図書編集長の松居 友氏との出会い
- 「剣淵は南フランスの田園風景に似た美しいまち」
- 東京や外国で生活した人の感覚から見る自然観の違い
- ヨーロッパでは絵本の原画は芸術品として高く評価され、あちこちの町に絵本原画の美術館がある。
- 全国で絵本原画美術館の話をして反応がなかったのが、絵本とはおよそ無縁そうな青年たちがいち早く反応した。
- 絵本原画美術館を建てたら町が賑わうのではないか。
- 「農業が大変な時期に絵本でめしが食えるか」という反応
- 町長との面会の結果、住民のコンセンサスを得るため講演会の企画
- 昔話を語るおばあちゃんの声が聞こえた。
- 14人で「創ろう会」を発足、矢継ぎ早に絵本原画展を開催
- ふるさと創生事業で「絵本の館」を実現
- 絵本の里にふさわしい農業をと、立ち上がる農家
- 設立時、周りから「会長は何もなくて良いので」ということから引き受けてしまった。
- 俳優、大地康雄氏との出会いと「映画じんじん」について
- 地域におけるお年寄りの方たちの役割はとても大きい。



Ⅱ 事業の満足度

回答者数 32名(回収率 56.1%)



【研修全体についての参加者の主な声】

- 参加者同士の意見交流会もあり、多くの学びと気づきがあった。参加して良かった。
- 内容が充実していた。
- 高齢者の社会への関わり方を考える機会となった。
- 現代のかかえる問題について、事例を含め教えていただいた。
- 民間団体や一般の方の意見を聞くことができた。
- 会場の雰囲気も温かく、心の面から参加しやすかった。
- 講演内容が興味を引く内容であった。
- 行政以外の参加者にとっては、これからの勇気や意欲につながる内容であった。
目的がぶれていない内容であった。
- 参加者にとって多様な事を学習することができた。
- 町に戻ってからの今後の高齢者教育に参考になった。
- 高齢者の実際の活動と活動を継続していくためのポイントを知ることができた。
- 基調講義後に実践発表があったため大変わかりやすかった。
- 講師の説明が良かった。
- 基調講義で新しい視点に立てるような話が聴けた。
- 目標をもつことの日常の大切さを強く感じた。
- 理論が理解できた。実践事例が参考になった。
- 「生きがい」とは何かを考えさせられた。
- 新たな出会いがあったことに感謝したい。話題がつきず勉強になった。
- 剣淵町を一度訪ねてみたいと思った。
- 夢を夢で終わらせないエネルギーを教えられた思いである。
- 発信することのテクニックを学ぶ機会となった。
- 高齢者の社会参加に対する考え方が少し変わった。今後の参考にしたい。
- 専門的な知識や技術の習得にはなっていない
- 実践発表について、実際の映像や生の声があれば、より実感が持てたと思う。